ミニシンポジウム

水産生物における内分泌攪乱物質
(Endocrine Disrupting Chemicals) の影響*1大嶋雄治*2 (九大農), 田辺信介*3 (愛媛大農),
橋本伸哉*4 (東水大), 堀口敏宏*5 (国環研)

はじめに

近年、環境中に放出された化学物質が生物の内分泌系を攪乱して、その生理・生殖・行動に大きな影響を与えることが明らかとなりつつある。特に、水界は様々な物質の最終到達地であるため、水生生物はそれら化学物質に曝露されている。

水生生物への影響を明らかにするため危急な取り組みが必要であるが、その知見はきわめて限られている。また、内分泌攪乱の問題を水産と言う立場から見た場合、水産物への依存度が高いわが国において、安全な食糧の確保という問題としても捕らえる必要がある。

本ミニシンポジウムでは、水生生物における内分泌攪乱物質の影響に関する現時点での研究成果を整理するとともに、今後の問題点を議論することがきわめて重要と考え、これを企画した。

水産生物における内分泌攪乱物質

(Endocrine Disrupting Chemicals) の影響

企画責任者 大嶋雄治(九大農), 田辺信介(愛媛大農),

橋本伸哉(東水大), 堀口敏宏(国環研)

開会の挨拶

大嶋雄治(九大農)

座長 小山次朗(中央水研)

1. 環境ホルモンの野生動物への影響

井口泰泉(横市大理)

座長 原 彰彦(北大水)

2. 魚類の血清タンパク成分への影響

2.1. 東京湾について 橋本伸哉(東水大)

2.2. 定量法の開発と応用

有蘭幸司(長大環境科学)

座長 本城凡夫(九大農)

3. 魚類の繁殖・ふ化に及ぼす複合汚染の影響

大嶋雄治(九大農)

座長 清水 誠(日大農)

4. 海産腹足類のインボセックス

堀口敏宏(国環研)

5. 海棲哺乳類への蓄積と影響

田辺信介(愛媛大農)

6. 総合討論

座長 小山次朗(中央水研)

清水 誠(日大生物生産)

原 彰彦(北大水)

本城凡夫(九大農)

閉会の挨拶

大槻 晃(東水大)

*1 Effects of Endocrine Disrupting Chemicals on Aquatic Organisms.

*2 Yuji Oshima (Faculty of Agriculture, Kyushu University, Hakozaki, Fukuoka 812-8581, Japan).

*3 Shinsuke Tanabe (Department of Environment Conservation, Ehime University, Tarumi, Matsuyama 790-8566, Japan).

*4 Shinya Hashimoto (Tokyo University of Fisheries, Konan, Minato, Tokyo 108-8477, Japan).

*5 Toshihiro Horiguchi (National Institute for Environmental Studies, Regional Environment Division, Onogawa, Tsukuba, Ibaraki 305-0053, Japan).